

## 英語教育におけるジレンマ

英語教育研究所所長 鳥飼慎一郎

ショールズ助教（以後、親しみを込めてショールズさんと呼ぶことにする）は1996年の立教着任以来、全カリ英語教育改革の先頭に立って、カリキュラムの立案・実行、多くの教材開発、テスト開発に携わってきた。ショールズさんが携わった事柄は、立教大学英语カリキュラム改革そのものであり、ショールズさんが直面した問題は、立教大学の英語カリキュラムの直面した問題であり、彼の解決方法は立教大学英语教育の進歩と前進を表すものであった。残念ながらショールズさんは2006年9月をもって退職することになった。ショールズさんの退職にあたり、彼の立教大学の英語教育に対する功績を称え、彼が歩んだ立教での歴史を皆が共有し、今後の立教大学英语カリキュラム改革の貴重な糧とするために、立教大学英语教育研究所が2006年7月6日に彼の記念公開講演会を開催した。そのタイトルは「The Jungle Gym: Curriculum Planning as Solving Dilemmas」であった。

ショールズさんがカリキュラム開発・実行で直面した問題の多くは二律背反的な矛盾をはらんだものばかりである。英語カリキュラムにおける「freedomとcontrol」の問題はその典型であろう。これまでの日本の大学英语教育は、担当教員に全てを任せるという方のが圧倒的に多かった。「先生のお好きなようにどうぞ」というやり方である。このやり方は、使用教材、教授方法、評価方法、評価結果などが各授業で異なり、効果的なカリキュラムの実施、公正な成績評価ができない。授業を担当する個々の

教員は、大学全体の英語カリキュラムの概要、方向性、目的・目標、そして自分の授業の位置づけや役割などを把握することが難しいからである。大学の英語教育をより効果的なものにし、限られた授業数の中でより効率的に個々の授業を展開し、学生の英語運用能力を向上させるためには、誰かが大学全体の英語教育の目的・目標を決め、それを達成するためのカリキュラムを作成し、そのカリキュラムを担当教員に提示し、実施してもらうとともに、適切なクラス分け、教材作成および選定をし、必要ならば統一テスト問題も作成・実施しなければならない。そうすることで初めて、大学全体として効果的な英語教育が可能となるのである。

しかしながら、このような統一的カリキュラムを実施することで当初の問題点は一応解決されるが、新たな問題も発生する。大学の教員にある一つの授業形態を強くお願いしすぎると、個々の教員のやる気を損ない、創造性が十分発揮されない恐れがある。クラスの事情や状況も個別的であり、同じ授業方法が全ての授業に最適であるとも限らない。ショールズさんが挙げている第一のジレンマ「the dilemma of *freedom* versus *control*」である。彼はこのジレンマをminimum requirementsを提案することで解決しようとした。日本人教員と外国人教員の考え方の違いを巧みに見極め、何をすればよいのかを明確にして欲しいと願う傾向の強い日本人教員にはminimum requirementsを「This is your starting point」と説明をし、自由度

を要望する傾向が強い外国人教員には「Well, you have at least you have to do this.」と説明するのである。教員の背景にある文化や考え方の違いを考えた巧みな説明のしかたである。

英語教育におけるジレンマは教員だけに限らない。日本人学習者の多くは英語を話すときにかかなり緊張する。この緊張を和らげるためにゲームなどの娯楽性のある活動を取り入れるわけであるが、そうなると今度は「楽勝クラス」あるいは「単なる英会話クラス」と呼ばれることになる。学生は授業で楽しくリラックスして英語を話すようになるが、実際の運用能力の育成はあまり期待できない結果が生ずる。彼が言う「eikaiwa dilemma」あるいは「nervousness dilemma」である。授業を担当している学生に教室外であったときに「How are you?」と聞いたものの「Ah...fine...」と言って学生が行ってしまったのを見て落胆するショールズさんの姿が目につかぶようである。教室でいくら英会話を教えても、英語を本当の意味で運用できるようにはなりにくいのである。そこで彼は内容のあることを表現する事が大事だと考えるようになる。いわゆるtopic-basedな授業の導入である。彼はnervousnessとuncertaintyを明確に区別し、conversationではなく、communicationを教えることがこのジレンマを乗り越えるのに有効な手立てであると考えるようになる。

ショールズさんが立教大学で直面した問題は、日本の大学における英語教育がこれまで直面してきた問題であり、彼の解決方法はこの問題に対する理論と実践とに裏打ちされた有効な方策である。英語教育では、ある問題を解決してもまた新たな別の問題が発生し、その問題を解決する事が新たな問題の発生原因になり、それがさらに新たな問題解決を迫られるという事がよく起こる。そう

ならば、何も問題を解決しないことが新たな問題を起こさない唯一方法ではないかという理屈も成り立つが、私はそうは思わない。問題を問題としてしっかりと認識し、それを解決すべく様々な方法論を提案し、実行し、検証してゆく過程こそが英語教育を発展させる方法論であり原動力であると考え。これを真摯なまでに立教大学英語教育の場で実践したのがショールズさんなのである。

とりかい しんいちろう

(本学法学部教授、英語教育研究所所長)